

対人恐怖と個人—環境の一致度が適応感に及ぼす影響の縦断的研究

道端 映奈

対人恐怖の心性を持つ人は一般に対人場面を苦手とし、集団における適応感が低くなる傾向がある。しかし適応感是对人恐怖の心性のような個人要因によってのみ決まるのではなく、環境要因も影響しているとする研究もある。そこで本研究では、対人恐怖の心性と適応感の関連を弱める要因として「個人—環境の一致度」を想定し、その効果を検討した。個人—環境の一致度とは、どのような集団に所属したいかという「心理的欲求」と、実際にどのような集団に所属しているかという「環境からの要請」が一致している程度を表す尺度である。

4月と6月に大学1年生を対象に質問紙調査を行い、対人恐怖、個人—環境の一致度とサークル・部活動における適応感を尋ねた。結果、個人—環境の一致度の下位因子である「コンピテンスの一致度」が高い場合、4月時点の対人恐怖が強くても6月時点の適応感がさほど低くならないことが示された。対人恐怖の傾向が強い人は不安定な自己概念を有しており、自己肯定のために他者からの評価や賞賛を求める傾向があるため、自分の能力を評価・賞賛してもらえる環境の方が適応感が高まったと考えられる。

従来の研究では、対人恐怖が適応感に影響すること、及び個人—環境の一致度が適応感に影響することが明らかにされていた。本研究において対人恐怖と個人—環境の一致度を同時に扱ったことは、この分野の新たな発見に繋がったと言える。特に、対人恐怖が強い人にとっては、コンピテンスの面で一致した集団に所属することが適応感を高めるために効果的であることが示された。この発見は、対人恐怖の心性を持つ人の社会参加を促すことに活用できる点で社会的意義があると言える。

本研究では4月と6月の2時点における調査にとどまったが、今後は長期間にわたって調査を行い、大学生活における適応感の変化や個人—環境の一致度の影響の変化、先行研究との差異をさらに明らかにする必要があるだろう。(社会心理学)